

“Immersion Program in America”の成果と課題 —アメリカの大学での正規授業参加型短期研修—

早瀬 博範¹・江口 誠²

Achievements and Problems of “Immersion Program in America”:
A Mini-Version of Academic Study-Abroad Program at an American University

Hironori HAYASE¹, Makoto EGUCHI²

Abstract

The aim of this paper discusses the achievements and problems of “Immersion Program in America.” The program is a Saga University original mini-version of study abroad program and is unique in that the participants can attend some regular academic classes conducted at Slippery Rock University, our sister university in the United States, so that they can have a clear image of the life of studying in an American university. The program is made up of three sections: 12-class Preliminary Trainings at Saga University prior to going to America, 12-day On-campus Trainings at Slippery Rock University, and 2-day Fieldwork either in New York City or in Washington, D.C. Beginning in 2013, the program has been carried out twice a year since the 2014 academic year as one of the most successful programs we’ve ever had: highly inspired and motivated by the program, about 10 percent of the participants, as expected, have studied abroad for a longer period every year; most of them have acquired their higher TOEIC scores.

【キーワード】 短期海外研修、Intercultural Competence、海外フィールドワーク

はじめに

佐賀大学では、これまで長い間、英語圏への海外研修を計画実施してきたが、「語学研修」を超えた、よりアカデミックな海外研修プログラムの必要性を考え、2013年度から“Immersion Program in America”と題する、長期留学への橋渡しとなるような短期の「ミニ留学」プログラムをスタートさせた。このプログラムの最大の特色は、参加学生がアメリカ大学の正規の授業を受講できる点である。本学の提携校である、アメリカ合衆国ペンシルベニア州スリッパリーロック大学（SRU）の全面協力により実現したもので、参加学生た

¹ 全学教育機構（併任）

² 全学教育機構（専任）

ちは短期間ではあるが、自分の専門に近い正規の授業をアメリカの大学で実際にアメリカ人学生と一緒に受けることで、留學生活のイメージを明確に持つことができる。参加学生は最大10名、研修期間は12日間と小規模なプログラムであるが、参加した学生のほとんどがその後、長期留學を希望し、実際に留學に必要な語学力を取得し、毎年平均2名が長期の交換留學をしている。その成果が認められ、2014年度からは前期と後期にわけて年2回実施し、今年度前期までに8回開催した。

本稿では、本プログラムの研修内容を紹介するとともに、その成果を分析検証し、さらにより良いプログラムに発展させるための課題について考察する。

1. 背景と経緯

(1) 語学研修を超えた「海外研修プログラム」

英語圏での海外語学研修は多くの大学が実施しているが、本学でもこれまで、アメリカ合衆国やオーストラリアにある本学の提携校が運営する語学センターで行ってきた。それらは通常、「語学研修」と異文化体験を目的としているので、参加条件として語学能力を問われることはなく、学生が希望すれば参加できるもので、実際その参加者の語学レベルはそれほど高くないものがほとんどである。したがって、現地での研修もほとんどが会話中心のESLクラスの受講と観光地見学などで、大学キャンパスを利用はしているものの、ほとんどアカデミックな内容はなく、まして大学の授業に参加したり、現地の学生と交流する機会はほとんどないのが普通である。本学においても、国際交流推進センターがオーストラリアやカナダでの同様の語学研修プログラムを持っている。このような研修も、ホームステイなどが充実しているので、英語を使った生活や異文化体験という点では、大事なプログラムである。

しかしながら、本学においては、上記のような語学研修に加えて、語学能力はすでにある程度持っている学生のための、アカデミックなプログラムの必要性を感じていた。いわば、語学研修を超えた海外研修プログラムの企画実施である。しかもアメリカの文化や歴史について現地で本学教員によるフィールドワークなどを取り入れ、学生を指導できる体制が取れば、単なる観光や異文化体験以上の成果が期待できると考えた。

このようなことを考えた背景には、本学の教養課程において、グローバル人材育成を目指した「留學支援英語教育プログラム」をスタートさせたことが大きい¹⁾。これは、将来留學を希望する学生ための特別カリキュラムで、4月1日に新入生の参加希望者全員を集めて英語の試験をし、選抜された学生50名からなる特別コースである。全学部から選ばれた学生たちは教養課程で修得すべき単位の約7割を、主として英語のネイティブスピーカーによる授業で受講しなければならない。この特別コースを2013年度から開始したことで、一部の上位の学生に限定はされるが、留學のための英語力強化の体制ができ、そのコースから長期短期の留學者が出るようになった。本学においては、このコースができたことで、語学力の向上を目的とした海外研修は、少なくとも中級以上の学生には必要でなくなり、むしろ長期留學

へのモチベーションを高められるようなプログラム、そして長期留学へ直結するようなプログラムが必要となってきた。

(2) 「ミニ留学」プログラム

近年、海外への長期留学をする学生数は激減している。「日本人の海外留学状況」(2017)によれば、2004年に82,945人だった海外留学生は年々減少し、2015年は54,676人となっている。留学先で一位の米国への留学で見ると、2004年は42,215人(米国での留学生の3.4%)だったが、やはり年々減少し、2015年には19,060人(米国での留学生の1.8%)となっている。筆者の経験でも、15年くらい前までは、多くの学生が海外留学を希望していたし、専門が英語関連の学生であれば、当然のように留学を希望し、実際長期留学をする学生の数も多かった。しかし近年では、授業で留学の話をして、「なぜ、留学をしなければならないのか」という質問が多く寄せられることが多く、留学の重要性から話を始めなければならない状況である。英語力習得の必要性は感じていても、留学までは考えていない学生がほとんどである。そのような学生には、教員からの「説得」だけでは弱く、実際に彼ら自身に留学の必要性を実感させる必要がある。そのためには、実際に海外に行って、短期間でも良いので留学の体験をさせる機会が与えられれば、最も効果的で早道だと考えた。

このような必要性を考えている時に、本学の卒業生で、現在アメリカ合衆国ペンシルヴァニア州立スリッパリーロック大学の日本語教員として働いている Yukako Ishimaru さんから、本学との交流提携の申し出があった。本学としては、大変ありがたい申し出であり、できれば長期留学の受け入れだけでなく、新たな短期研修の場にならないかと提案し、二人でそのプログラムを計画した。そして出来上がったのが“Immersion Program in America”というプログラムで、最大の特徴は、参加学生はスリッパリーロック大学の正規の授業を受講できるというものである。このような特典は、受け入れ先大学での理解と支援がなければ実現できないもので、Ishimaru さんが学内の有力者に直接交渉して得られたものである。これこそ、本学が望んでいた、まさしく「ミニ留学プログラム」であり、Ishimaru さんの功績の賜物である。

さらに大学の研修に加えて、ニューヨークでのフィールドワークを計画した。スリッパリーロック大学は、ニューヨークからも飛行機で1時間ほどの距離にある。大学での研修の後に、アメリカの文化や歴史の宝庫であるニューヨークの研修を最後に2日ほど入れることで、より充実した魅力あるプログラムにした。単なるニューヨーク観光ではなく、アメリカ文学や文化を専門にしている早瀬が現地でのフィールドワークとして講義をすることで体験学習として大いに効果があると考えた。

2015年度からは、研修の成果が明確に見え始め、学生からの要望を受け、年に2回、前期と後期に開催することにした。2014年度までは早瀬だけでやっていたが、2015年度からは江口も加わり、二人で分担して実施している。さらに、せっかくであれば、フィールドワーク

先をニューヨークだけでなく、アメリカ政治の中心ワシントン D.C.もいいのではないかと考え、現在では、前期はニューヨーク、後期は D.C.ということで、それぞれ特色を出すことにした。

2. Immersion Program in America

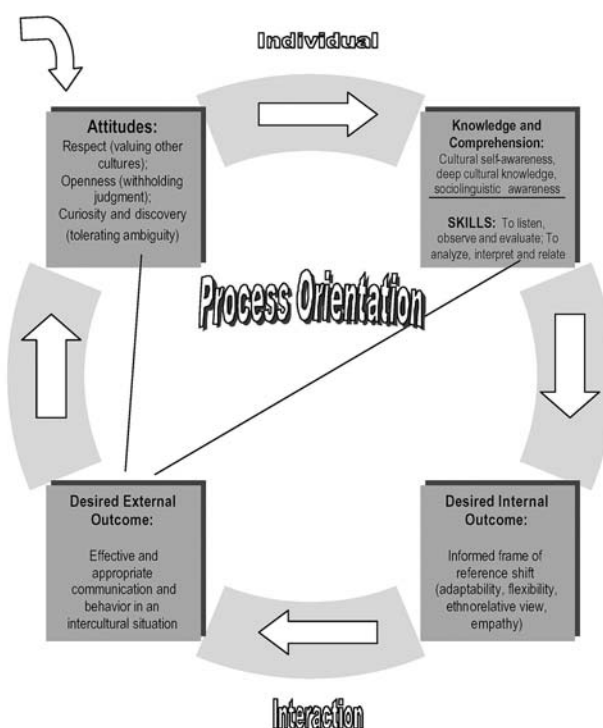
(1) プログラムの目的と設計

本プログラムの主目的は「ミニ留学体験」である。単なる語学力強化や表面的な異文化体験以上の研修を目指して、メニューとしては、アメリカの大学の授業を受講、大学生や地域の人々との直接的交流、アメリカの文化や歴史を直接学ぶフィールドワークなどを入れることとした。この研修を通して、英語での異文化間コミュニケーション能力、異文化への高い感性、視野の拡大を目指している。

ここで挙げた目的は、Deardorff (2004) が「異文化間能力モデル」(Intercultural Competence Model) として提唱したものと同様である (198)。

このモデルでは、「異文化間コミュニケーション能力」は、以下のように4つの段階を経て形成され则认为る。(1)態度 (Attitudes) から始まって、(2)「知識と理解」(Knowledge & Comprehension) へと移る。この過程は個人のレベルで起こる。それらが土台となり、異文化の環境において様々な人と触れ合うことで(3)「内的アウトカム」(Internal Outcome) が醸成され、それが高められ (enhance)、(4)「外的アウトカム」(External Outcome) となって見える形で現れる。最後の「外的アウトカム」とは、様々な異文化の状況において、「効果的にかつ適切に的確なコミュニケーションが取れる」段階をいい、これが Deardorff (2004) の定義する「異文化間コミュニケーション能力」である。

大まかに言えば、(1)と(2)は日本での「事前研修」で行い、(3)から(4)を海外での研修や帰国後の成果として期待している。このモデルの中で最も大事なものは(1)「態度」であると



Deardorff (2004) は述べている (197)。他の人の考えや価値観への尊敬 (Respect)、異文化への関心や偏見のないオープンな姿勢 (Openness) を、まずスタートして重要視している。本研修においても、参加者の選抜の際から、そのような観点を重視している。選抜された学生は「事前研修」において、(2)の「知識と理解」を可能な限り伸ばすことが求められることになる。(2)では、英語力に関しても社会言語学的な観点 (Sociolinguistic awareness) から、様々に想定される状況を踏まえて適切な英語表現やコミュニケーションスタイルが求められる。さらには「文化への意識」 (Cultural Awareness) も重要で、アメリカ文化に関する知識だけではなく、自国の文化に関する知識も必要となるだろう。アメリカでの研修においては、異文化への「適応力」 (Adaptability) や「柔軟性」 (Flexibility) を養い、異文化理解の意識を醸成できるようなプログラムを設計する必要がある。それらがうまくいけば、(1)(2)の段階でレベルの高い学生は、研修の後半になると、適切な態度と表現で英語での対応ができるようになる。これは最終段階である「外的アウトカム」の段階に移行しつつあることを示している。

本プログラムも、この「異文化間能力モデル」に従い、事前研修、アメリカでの研修、事後研修を設計し、以下のような研修期間と研修項目としている。(以下は今年度前期のプログラム内容である)

表 1

研修期間	研修区分	主な研修項目
5 / 10から 12講座程度	I. 事前研修	異文化間コミュニケーション力演習 (4 回)
		英語スピーキング演習 (2 回)
		アメリカ文化講義 (2 回)
		アメリカの歴史講義*1 (1 回)
		TOEFL 対策講座 (1 回)
		留学直前「日本史特講」(1 回)
		危機管理講座 (国際交流推進センター開催) (1 回)
9 / 14 ～ 9 / 23	II. SRU での研修	大学の講義受講
		ESL クラス (5 回)
		ホームステイ (9 日間)
		高校訪問、交流 (1 回)
		日本語授業への参加 (1 回)
		日米の学生によるディスカッション
		研修成果プレゼンテーション (1 人10分の PP による発表)
9 / 23 ～ 9 / 24	III. フィールドワーク	日本文化のデモンストレーション (フェアウェルパーティで)
		ニューヨークでのフィールドワーク*2 (The United Nations; 9/11 Memorial Museum, The Statue of Liberty & the Immigration Museum; The Metropolitan Museum; The Museum of Modern Art; Broadway Musical<WIKCED>; New York Stock Exchange; One World Observatory; the Rockefeller Center, etc.) の中から学生の希望により組み合わせて、グループで行動。引率教員や各建物のガイドによる講義。

10/11	IV. 事後指導	成果報告及び評価
10/24		成果発表

* 1：3月実施のプログラムではワシントン D.C.に行くので、アメリカの政治に関する講義となる。

* 2：3月実施のプログラムでは、NYC ではなくワシントン D.C.でのフィールドワークとなる。

(2) 選抜方法

前述したように、本研修の参加学生は、英語力が中級以上で、異文化に関心が高く、積極的にコミュニケーションを取ろうとする意志がはっきりと見える学生とした。応募者に対して英語による15分程度のインタビューにより、10名選抜している。よって、すでにモチベーションが高い学生の集団と言っていい。10人という数字は、一人の教員が引率可能な人数としては10名が限度であるという理由である。研修の成果と学生の間での人気が出てきたので、2015年度からは、前期と後期の2回を実施している。通常、前期実施のプログラムには30名から40名の応募がある。しかし後期実施に対しては、時期の問題のためか、ほぼ定員通りであるが、両方とも選抜方法も基準も同じとしている。

(3) 研修内容

ここでは、出発前の「事前研修」、SRU での研修、そして、ニューヨーク及びワシントン D.C.でのフィールドワークについて説明する。

I. 事前研修

アメリカでの研修だけでなく、出発前の事前研修も重視し、しっかりと研修の目的を認識させ、そのために必要となる知識や英語力の強化、異文化コミュニケーション力の訓練を行うこととしている。具体的には、表1に示している内容であるが、ここでは、「異文化コミュニケーション力演習」と「留学直前 日本史特講」について説明する。

①「異文化コミュニケーション力演習」

多くの短期研修において、英語力強化を目的とした事前の指導や訓練は行われているが、その中身はほとんど語学訓練が中心である。もちろん高い語学力が研修の成果に影響することは確かであるが、Schartner & Young (2016) は、それが一般の語学テストで測られるような標準的な言語能力だけでは学生の自信にどれだけ役に立っているかは不確かであると述べている。彼らは単なる語学的な訓練だけでなく、異文化間コミュニケーション能力の訓練を行なうべきだと主張している。Young et al.(2013) も「異文化に関する学習を言語学習に取り入れるべきだ」と言っている。また Fowler & Blohm (2004) は、ケーススタディ、ロールプレイなどを取り入れた実践的訓練が有効だと述べている。以上のような観点から、本研修の事前研修では、さまざまな英語コミュニケーション能力の強化のための講義や演習を行っている。

本稿では、「ケーススタディを取り入れた実践的なロールプレイ」を紹介する。これは実践的な訓練ということで学生たちの評判も高い。そこでは、学生たちが具体的に遭遇する場

面 (situation) を設定して、そこでどのような表現で会話を始めるかという訓練を行なう。これを行う際は、実際にネイティブの先生に同席してもらい、学生の相手役をやってもらっているのです。設定は実際の状況に近く、臨場感がある。具体的には以下のようなさまざまな場面設定をしている。

Situation 1 「これから生物学の講義を受講しますが、教室 (生物学科の202講義室) がどこにあるのか、迷ってしまいました。近くにいる学生にどのように聞けばいいでしょうか」

Situation 2 「あなたは、今受けた授業で出された宿題についてよく理解できませんでした。授業で会ったアメリカ人の学生に助けを求めたいと思っています。どのように話しかけ、助けを求めたらいいでしょうか」

Situation 3 「ホストから、このアメリカの滞在期間に何をしたいのかと尋ねられました。どのようにこたえますか」

Situation 4 「飛行機の中で、アメリカ人と隣同士になりました。どのように話しかけますか」

流れとしては、上記の場面が想定されたメモを学生に渡し、一分間考える時間を与える。その後ネイティブの先生を相手に会話を始める。そして、学生の使った英語や対応に関して、ネイティブの先生からコメントや改善点を指摘してもらう。さらに全員で良い点や改善点を話し合う。学生たちにとっては、即興性が問われて大変であるが、事前のシミュレーションができ、改善点もわかり、課題も見つかるので、異文化コミュニケーション力を養うには効果的である。

②「留学直前 日本史特講」

アメリカでの質問で意外と多いのが日本に関するものである。ところが、日本人が日本のことに関して彼らの期待に沿えるほど知識や情報を持っているとは限らない。日本にいても、むしろ日本にいるから、日本のことを知っているわけではない。2014年度に最初のグループのアンケートで「日本に関する質問に答えられなくて、恥ずかしい思いをした」とか、「日本についてもっと調べておけば良かった」、また「佐賀の歴史もよく説明できなかった」などの声が寄せられた。そこで2015年度から、本学の日本史の先生で佐賀の郷土史も専門にされている宮武正登教授をお願いをして、「留学直前日本史特講」という講義を事前研修に入れることにした。

講義内容としては、「日本の概要」(日本の地理的民族的情報)、「日本の歴史区分」、「外国人の日本観に関する歴史事実」(芸者、武士、侍、忍者、歌舞伎、浮世絵、相撲など)、それと「日米関係の歴史」と盛りだくさんである。受講した学生からは、「日本人として当然知っておくべきことを専門的に習えてよかった」、「アメリカでは日本のことを聞かれることが多いので、習っていて助かった」、「知っているようで、結果何も知らなかったの、日本人としてとても役立った」などの感想が聞かれた。この開催がきっかけで、現在では、本学の短

期プログラムの参加者は派遣国がどこであれ、全員この講座が文字通り必修となっている。

II. SRU での研修

SRU での研修は、通常、実質 6 日間の短い研修であるが、大学の正規の授業の受講、ESL クラスへの参加、ランゲージパートナーとの交流、高校訪問とメニューがいっぱいである。ここでは、研修の目玉といえる大学の講義と、アメリカ人と生活を通しての交流と異文化理解を支え、アメリカ滞在を魅力的なものにしてくれている、ホームステイとランゲージパートナー支援制度について紹介する。

①大学の講義の受講

本研修プログラムの「目玉」とも言える SRU で正規に開講されている授業に、本学の学生が参加するというものである。これこそ、Ishimaru さんが様々な学部の学部長や授業担当教員に個別にお願いし、提供をしてもらったものである。以下が、2017年度に学生たちに提供された授業タイトルである。日本ではなかなかないような科目もある。

Communication Research Methods; Early Childhood Theory & Practice; Low Incidence; Disabilities; Inorganic Chemistry; Public Speaking; Principles of Marketing; Issues in Communication Technology; Introduction to Health Education; Interactive Multimedia; Leadership, Advocacy & Program Development; United States and Canada; Environmental Health; Introduction to Creative Writing; Creative Dance for Children; Principles of Macroeconomics; Interpreting Literature; United States 1815-1920; African American History

各授業によって違いはあるが、アメリカの学生たちと一緒に授業を受け、意見を求められ日本の状況について紹介したり、レポートを書いたり、プレゼンをしたりしている。そしてほとんどの学生が、アメリカの教授のインターラクティブな授業スタイル、学生が積極的に発言する姿勢に大いに感化される。結果、このような授業ももっと受けたいと思ったり、実際に留学すれば多くのことがもっと学べると実感し、留学を真剣に考える学生が出てくる。留学のイメージをはっきりと持つことができるという点で、直接的な効果がある。

さらに、留学をしない学生でもアメリカの学生たちが積極的に自分の意見を言う姿勢に感化され、日本に帰ってからは、受講の態度を変えなければと思ってくれる学生がほとんどで、その点でも大いに意味がある試みと言える。

②ホームステイ

SRU の所在地、スリッパリーロックの町は田園風景の広がる小さな大学都市で、それほど海外交流が行われているといえる場所ではない。このような土地柄の町で、日本人を 1 週間でもホームステイさせてくれる家庭があるだろうかと当初は心配したが、結果は全く反対で、毎回、どの家族もどの学生も大満足というアンケート結果を得ている。これも Ishimaru さんが地方紙に「日本人学生のホームステイ先を求む」という募集広告を出したところ、日

本に強い興味があったり、国際交流に熱心な方からたちが、無償で名乗りをあげてくれている。都会での金儲けでホームステイを引き受けている人たちとは異なり、土日には家族全体で交流計画をたて、温かいもてなしをしてくれている。学生たちにとってはアメリカ人の人となり、生活、考え方などが直接学べるだけでなく、多くの学生が「アメリカのダディ、マミー」と呼ぶほど文化を超えた親しい関係を構築している。その後このプログラムに参加した学生の多くが、長期留学先としてSRUを選んでいるが、本研修でお世話になったホストが待っていてくれるというのも大きな理由となっている。

③ランゲージパートナーによる支援制度

SRUに到着したその時点から、アメリカ人の学生2名がランゲージパートナーとして日本人学生一人ひとりについてくれるという支援制度を設けている。彼らは、日本にいるときから、すでにメール等で親しくなっているので、出会ったらすぐに仲良くなっている。この制度もこの研修の成果の要因である。アメリカの大学や日常生活での問題から、個人的なことまでも含め、あらゆることに関して、全く友達目線で滞在中常にサポートしてくれる心強い味方である。この制度のおかげで、短期間の滞在ではあるが、英語を日常的に使用する機会となっている。

Ⅲ. フィールドワーク

①ニューヨークでのフィールドワーク

実質1日半しか時間がないので、あまり欲張りにはできないが、歴史的かつ文化的に、そして英語力強化にも役立つ場所を毎回学生たちと相談しながら選択している。しかも事前にすべての箇所に関する詳細な情報、歴史、文化的意義や価値、見るべきポイントなどをグループで調べて、英語で発表させ、質疑応答を行っている。それぞれの場所では、可能な限り専門の職員による英語ガイドを予約している。よって、学生たちはそれぞれの場所で、何を見て、何を知るべきは知識としては入っている状態で、フィールドワークに望んでいる。

年によっての多少の違いがあるが、定番となっている場所が幾つかある。まずは「自由の女神像」(The Statue of Liberty)と「移民博物館」(Immigration Museum)。ここではアメリカの自由と平等の象徴を目にした時の移民たちの夢や希望だけでなく、入国できなかった人々の辛さにも思いをはせてみる。2つ目は、9/11 MemorialとOne World Observatory。9/11の同時多発テロはなぜ起きたのか、アメリカの対応やその後の影響についても考えてみる。3つ目は、Metropolitan Museum、Museum of Modern Art、Natural History Museumと人気の美術館から1つを選び訪問。4つ目はブロードウェイミュージカル鑑賞。現在最も人気があり、しかも学生の英語レベルで十分楽しめるという点から「ウィキッド」(Wicked)を毎年鑑賞している。それでも、ぶっつけ本番では難しいので、事前研修の際に、詳しく書かれた英語版の解説書を読ませている。つまり、劇のストーリーも、使用される英単語、さらには歌の歌詞までも十分理解できた状態で臨ませている。このミュージカルは英語の生き

た教材として素晴らしく、学生たちは俳優たちの第一級の歌声に魅せられ、感動しつつ楽しみながら英語と接している。劇場を出るときには「今度来るときには、すべて理解できるように英語を頑張りたい」とみんなが英語学習への高いモチベーションを語っている。

これらが定番であるが、他には「国連本部」(United Nations Headquarters)に行こうと計画するが、時期の問題で大きな国際会議と重なったりして、実現できたのは一回のみである。このように世界一の大都市の雰囲気を楽しみながら学習しておくことは、学生たちにとって、とてもいい刺激になっているようで、本プログラムの魅力の一つとなっている。

②ワシントン D.C.でのフィールドワーク

2017年春期のSRU 研修を例にとると、ヴァージニア州アーリントンのホテルにチェックインした後、地下鉄でタイダル・ベイスン (Tidal Basin) に向かう。その頃はちょうど桜祭りが始まる頃でもあり、咲き始めたばかりの桜を鑑賞しながら、その湖畔にあるトーマス・ジェファソン・メモリアル (Thomas Jefferson Memorial) やフランクリン・デラノ・ルーズベルト記念碑 (Franklin Delano Roosevelt Memorial) を見学して歴代アメリカ大統領についての知識を深め、その日の研修は終了となる。

滞在2日目は、ナショナル・モール (National Mall) と呼ばれる多くのスミソニアン博物館 (Smithsonian Museums) が立ち並ぶ場所を訪れる。まず午前中は、アポロ11号やライトフライヤー号の展示で有名な国立航空宇宙博物館 (National Air and Space Museum) を訪れ、午後は各学生が自由にその他の美術館等を訪れる。次に、全員でナショナル・モールの西端に位置するリンカーン記念堂 (Lincoln Memorial) へ移動し、アメリカ合衆国代16代大統領であるエイブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln) の有名な座像とその東方に伸びるリフレクティング・プール (Lincoln Memorial Reflecting Pool) を見学し、その日のフィールドワークは終了となる。

その翌日は、まず午前中にアメリカ合衆国議会議事堂 (United States Capitol) の見学ツアーに参加する。20名程度が1グループになる英語によるガイドツアーで、約1時間程度、議会の成り立ちや建物、絵画等の説明を聞いて議事堂についての知識を深める。ツアーの後は、議会内のカフェテリアで昼食をとり、専用の地下道を通して、隣接するアメリカ議会図書館 (Library of Congress) へ向かう。この図書館は、貴重な『ゲーテンベルグ聖書』などの展示があり、小さいながらもかなり見応えがある。次に、ホワイトハウスのビジターセンター (The White House Visitor Center) を訪れる。因みに2016年度の研修では、スリッパリーロック大学の教員から地元の政治家を通じて、事前にホワイトハウスの見学を申し込んでいたが、残念ながら最後の段階で実現しなかったという経緯があった。このビジターセンターの見学でワシントン D.C.でのフィールドワークは全て終了となる。ワシントン D.C.でフィールドワークを実施する利点は、全ての施設の入場料が無料という点である。フィールドワークはあくまで研修の一環であるということを踏まえ、費用対効果という面も考慮に入れると、ワシントン D.C. はアメリカの文化や政治を知る最も適した場所であると思われる。

3. 成果

(1) 長期留学へ

表2は、これまでの本研修の参加者のうち実際に長期留学に行った学生の数である。平均すると一回の研修で約2割の学生が長期を希望し、英語力を短期間で伸ばし、長期留学を獲得している。本研修が長期留学へ繋がるための「ミニ留学」という当初の目的はほぼ果たされていると言えるだろう。

表2

実施年度	2013前期	2014前期	2014後期	2015前期	2015後期	2016前期	計
参加者数	10	10	9	10	6	10	55
長期留学者数	5	1	0	4	2	2	14 (25%)

(2) 英語力の伸び

本学ではTOEICテストを学生全員が受験することになっているので、それを利用して、研修前と研修後のスコアの伸びを見ることができる。「研修後」とは、帰国後、約半年後ということになる。

もともと中級レベルの学生が多いが、後述のアンケート結果にもあるように、英語学習への意欲が高められ、中には長期留学を目指すという目標も持つものもいる。よって、表3が示すようなスコア上昇に繋がっている。

表3

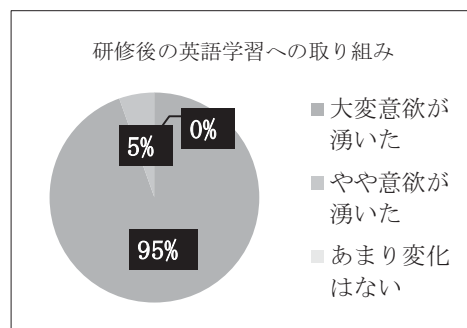
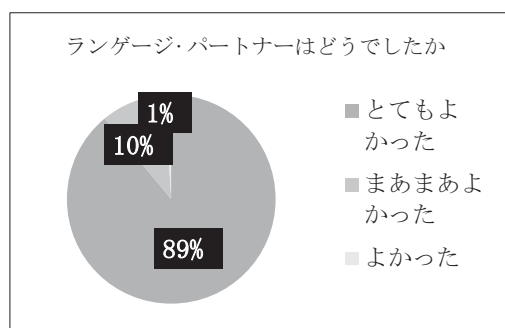
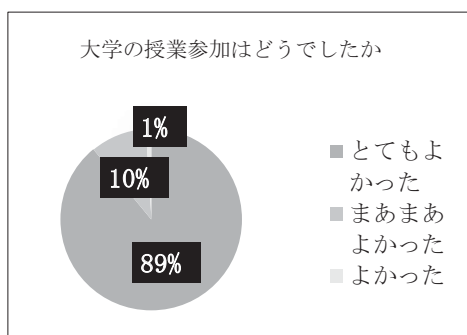
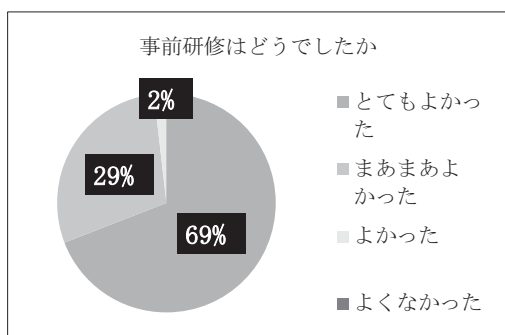
		研修前	研修後	平均スコア伸長
2013年度 前期	平均点	540	630	+90.0
	最高点	595	780	
	最低点	430	515	
2014年度 前期	平均点	617.8	663.3	+45.5
	最高点	770	820	
	最低点	465	575	
2014年度 後期	平均点	457.9	496.4	+38.5
	最高点	575	545	
	最低点	360	460	
2015年度 前期	平均点	573	678.8	+105.8
	最高点	695	780	
	最低点	450	435	
2015年度 後期	平均点	541.7	517.5	-24.2
	最高点	690	665	
	最低点	330	340	
2016年度 前期	平均点	536.5	606.0	+69.5
	最高点	740	825	
	最低点	280	480	

(3) 学生へのアンケート結果

ここでは、プログラムの根幹に関わる事項に関するアンケート結果（2013年度から2017年度前期開催のプログラムにトータル55名の学生が対象）を示している。本プログラムの成

果にもつながる「事前研修」について、本プログラムの最大の特徴である大学の正規の授業について、参加者を毎日サポートするランゲージパートナー制度、そして、研修の内的外的アウトカムに関するものである。

以下の結果が示すとおり、ほとんどの学生が「よかった」以上の回答をしているので、ほぼこちらの期待通りの成果と言ってよいだろう。



(4) 学生からのコメント

参加学生からは多くのコメントが寄せられた。以下のように大まかに4つに分類して、主な意見を抜粋しておく。短期間であったが、英語を使ってコミュニケーションすることで、異文化の人とも交流ができるということを実感し、それが英語を学ぶことの高い動機付けとなっている。アメリカの文化だけでなく、日本人として日本の文化にも目が向き、文化への強い関心（cultural awareness）が高められた。アメリカの大学の授業と日本の大学の授業の違いはほとんどの学生が指摘しているが、アメリカの学生たちの授業での積極的発言の態度に刺激され、帰国後は日本の大学でも積極的に発言することにしたという学生も多くいた。そして、ほとんどの学生が、今回のように自ら研修に参加し、新しいことに挑戦したことで、チャレンジ精神や向上心、さらには英語だけでなく他の勉強や日常生活にも積極性に取り組むように意識も変わったと述べている。これらは「内的アウトカム」と呼んでいい成果ではないだろうか。

①英語力、コミュニケーション能力について

- 英語での会話をやっていくうちに、苦手意識が少しずつ薄れていっただけでなく、楽しさを感じ始めることができるようになった気がする。また、カンパセーションパートナーと話す中でアメリカとの文化の違いもたくさん感じる事ができた。
- 英語力に関しては、リスニング力はついた気がするが、何度も聞き返したり、質問にうまく答えられなかったりすることも多かったため、日本に帰ったらもっと英語を話す機会を増やさなければと思った。
- まず英語に対する積極性が身につけられた。今回のプログラムの中で様々な人たちと話すときに、相手が間違えるのは当たり前で、その伝えよう、理解しようという気持ちが大事であると教えてくれたため、私は英語を使うことにためらいは感じられなくなった。このプログラムを通して自分の英語に対する向上心が上がり、また英語の能力も当初に比べて上がったと私は感じた。
- 英語能力の低さや、日本に関して無知であることを改めて感じ、日本でやるべきことがはっきり分かったことは大きな成果。
- なんとかしてコミュニケーションを取ろうという気持ちが生まれて、たくさんの人と交流できたのがうれしかった。言いたいことが表現できないというフラストレーションが学習のモチベーションを高めてくれた。本当に良いプログラムだった。
- 知識だけの英語ではダメだということ。使える英語を意識していかなければならないということ。
- 間違いを恐れずに積極的に話すことが大切だということを学びました。コミュニケーションをとる楽しさを味わうことから、もっと英語力を高めたいという気持ちがわいてくると思います。
- 今まで以上にやる気や英語を使って会話すること、多くの人との交流することの楽しさを改めて感じる事ができた。

②異文化への関心、日本文化への再認識

- 自分の中のアメリカのイメージと実際のアメリカとの間のギャップを感じ取ることができた。アメリカに行ったことにより、今後の課題や目標を見つけることができた。
- 言葉には詰まることも多かったが、ホストファミリー、カンパセーションパートナー、大学の学生等に積極的に話しかけることができた。また、食文化、人、施設、大学の授業などさまざまな場面で違いを感じ、多様な異文化を学ぶことができた。
- 英語によって、日本から遠い国に暮らす違う文化を持った人たちとコミュニケーションをとり、楽しい時間をともに過ごすことができるということをこの研修中に体験できた。研修に参加する前は、ホームステイに少し不安を持っていたが、ホストファミリーの思いやりのある温かなもてなしを受けて、とても感謝している。この体験を通して、ホスピタリティーがいかに重要であるかということを知ることができた。
- 日本人とアメリカ人の文化違いを学べ、良いところを見習いたいと思った。アメリカの学生は授業中にとってもアクティブで発言することが多く、日本では経験できない素晴らしい体験になった。また、アメリカに対するイメージも変わった。行く前は日本人ほど親切な民族はいないと勝手に思っていたが、実際はアメリカの方々はとても親切で驚かされることも多くあった。
- 日本のカルチャーはまだまだ人気だということが分かった。日本人として日本の伝統や歴史に誇りを持っていいということが分かった。日本文化をもっといろんな外国人に知ってもらいたいと思うようになった。
- アメリカの食や文化を学ぶことができて、かつ日本との違いも学ぶことで、日本の良さに改めて気付くことができた。
- 文化の違いにも触れられて、新しい視点からの考えを得ることができました。

③アメリカの大学や大学生について

- 現地の大学での授業は教員の話の全て聞き取って理解するというに苦戦し、長期留学を考えるならばもっと英語力が必要だと痛感した。また、現地でできた友達と会話していて、自分の意見を思っているとおり伝えることができず、もどかしさを感じたときがあり、さらに英語の勉強に励み、英語で深い議論も

できるようになりたいと思った。

- このプログラムを通して、より英語を学習する意欲が深まったと感じ、英語という言葉の学習だけにとどまらず、アメリカの文化的な側面も強く体感することができた。スリッパリーロック大学での講義は、私にとってはすべて英語が用いられ本場の学生用の講義でもあったため理解するのに若干苦労したところもあった。しかしながら、元々アメリカ人の大学生が大学でどのような工学系の専門を学んでいるのかというところに興味があったため私にとってとても貴重な経験になった。
- このプログラムを通して、日本の学生の授業への意欲の低さを思い知りました。
- アメリカの大学生は日本の大学生よりはるかに勉強熱心。自分も頑張ろうと思った。
- アメリカの学生のように積極的に質問したり、意見を述べなければならないということ。

④積極性、視野の拡大

- 今回得られたものとして一番大きかったのは、英語や異文化交流へのモチベーションである。渡航前も、英語や異文化交流への興味は高いほうだったが、約二週間日本とは全く違う環境の中で英語のみを使っての生活は、自分の英語力がまだまだであることや、相手の言っていることをもっと知りたいという気持ちを感じ、学びたい、もっともっと理解したいという英語への向上心が高まる毎日であった。
- 学習というよりは積極性やチャレンジ精神が伸びたことを感じます。
- 何事も挑戦していくことがとても大切だと思いました。アメリカの学生は自分の意見が間違っていようと積極的に発言していて、いかに自分が消極的だったかがわかりました。失敗を恐れず、挑戦していくことの大切さ、挑戦する前の準備がとても大切だということがこのプログラムを通して学ぶことができました。
- 主体的に動くことの大切さ。新しい環境での適応力。
- もっと英語力の勉強を頑張ろうと思え、モチベーションがとても上がりました。自分自身が成長できて良かったです。
- 自ら積極的に動いて、人に接していくことで、自分が学ぶことは沢山あるということ。
- 英語という言葉ができることで、自分の世界が広がり、それらを通して成長できるということ。

4. 課題

前項で見てきたように、本研修は学生の満足度も高く、かつ目に見える成果もあげてきている。そのために年2回実施している。以下では、さらに質的に高め、より高い成果を出すための課題について考察する。

(1) 事前指導について

アンケート結果を見ても、「事前指導」に関しては、これまでのすべての学生が「よかった」以上のコメントをしているので、メニューとしては年々充実してきていると言えるだろう。しかしながら、全学部の学生を対象にしているために、なかなかスケジュール調整が難しく、回数も限られてくる。本研修は教養課程の正規の授業科目としているものの、実際は時間割外で放課後に開いている。定期的にシステムティックなカリキュラムが組みにくい。事前指導でしっかりと「知識、理解、スキル」を身につけておくことが、最終成果にも繋がるので、改善を急ぎたい。

(2) アメリカでの研修内容及び期間について

アメリカでの研修に関しても、学生たちの満足度は高いので、こちらもメニューとしては現状で良いのではないと思われるが、より質を上げる必要はある。中でも大学の授業の受

講に関して、参加学生の英語のレベルもあり、現在は、参加、体験するという段階で終えている。せっかくの機会なので、事前の準備などを行なうなどもっと活用できないか検討中である。

滞在期間についても、検討の余地がある。目下、全体で12日間である。往復の飛行運賃が18万円ほどかかるため、全体で約30万円となる。せっかくなので、せめて2週間ほどにできればと検討している。例えば最初の1週間はEFLの授業のみを受講し、残りの1週間は現行の研修と同じように午前はEFLの授業で午後は大学の通常の授業を受講する、などの検討を行いたい。ただ、そうすると引率教員の滞在費が高くなる。この点に関しても、教員の引率期間は現状で、学生だけの滞在期間を伸ばすという方法もあるだろう。

(3) 春季研修の事後指導について

前期実施の研修は9月なので事後指導は後期になって行うことができる。一方、春期のSRU研修は3月末にスリッパリーロック大学に渡航するため、事後研修が行えないという点である。そのため、事前研修開始前と研修後にTOEFL ITPテスト等によって参加学生の英語力の向上度を測ることも極めて困難となる。事後指導も大事なので、この点も対策を講じるべきである。

おわりに

近年「内向き」と言われる日本人学生の目を海外に向けさせるための方策の一つとして、大学が魅力的なプログラムを構築し、様々な機会を提供する必要がある。そのような考えのもと、本学では、アメリカの提携校であるスリッパリーロック大学の全面協力により大学の正規の授業に学生が参加するという“Immersion Program in America”を実施している。2014年からは年に2回実施しているが、すでに目に見える成果が出ている。参加者はアメリカの大学の授業を受けたことで、高いモチベーションと向上心が育ち、結果、参加者の1割が毎年長期の交換留学生となって飛び立っている。加えて、アメリカ人の学生が隣で常時支援してくれるランゲージパートナーによる支援制度や、実際のアメリカの生活に触れるホームステイ、ニューヨークやワシントンD.C.でのフィールドワークなども、短期間の研修にもかかわらず、成果が出ている理由である。また、研修の成果を支えているのが、「異文化間コミュニケーション力演習」などの出発前の事前指導である。大学の授業がフォローでき、学生や一般のアメリカ人と人的交流をスムーズに行えるような訓練を行っている。

昨年度からは、同じようなメニューで、佐賀大学でSRUの学生のための研修を開始した。しかも、すでに昨年佐大プログラムに参加した学生が、長期留学生として本学で学んでいる。文字通り「相互交流」の関係がスタートした。改善を重ね、両者ともより良いプログラムに育てていきたい。

注

¹ このプログラムの成果に関しては、早瀬（2017）を参照。

参考文献

- Dearorff, D.K. (2004). *The Identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization at institutions of higher education in the United States*. A Dissertation submitted to North Carolina State University.
- Fowler, S., & Blohm, J. (2004). An analysis of methods for intercultural training. In *Handbook of intercultural training*. (Ed.) D. Landis, J. Bennett, and M. Bennett, 37-85. Thousand Oaks: SAGE.
- Schartner, A., & Young, T.Y. (2016). Towards an integrated conceptual model of international student adjustment and adaptation. *European Journal of Higher Education*, 6(4), 372-386.
- Young, T. J., Sercombe, P.G., Sachdev, I., Naeb, R., & Schartner, A. (2013). Success factors for international postgraduate students' adjustment: Exploring the roles of intercultural competence, language proficiency, social contact and social support. *European Journal of Higher Education*, 3(2), 151-171.
- 早瀬博範（2017）「『留学支援英語教育カリキュラム』の成果と課題—佐賀大学教養課程でのグローバル人材育成の試み—」『佐賀大学全学教育機構紀要』第5号、99-114.
- 文部科学省（2017）「日本人の海外留学状況」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/___icsFiles/afieldfile/2017/12/27/1345878_02.pdf